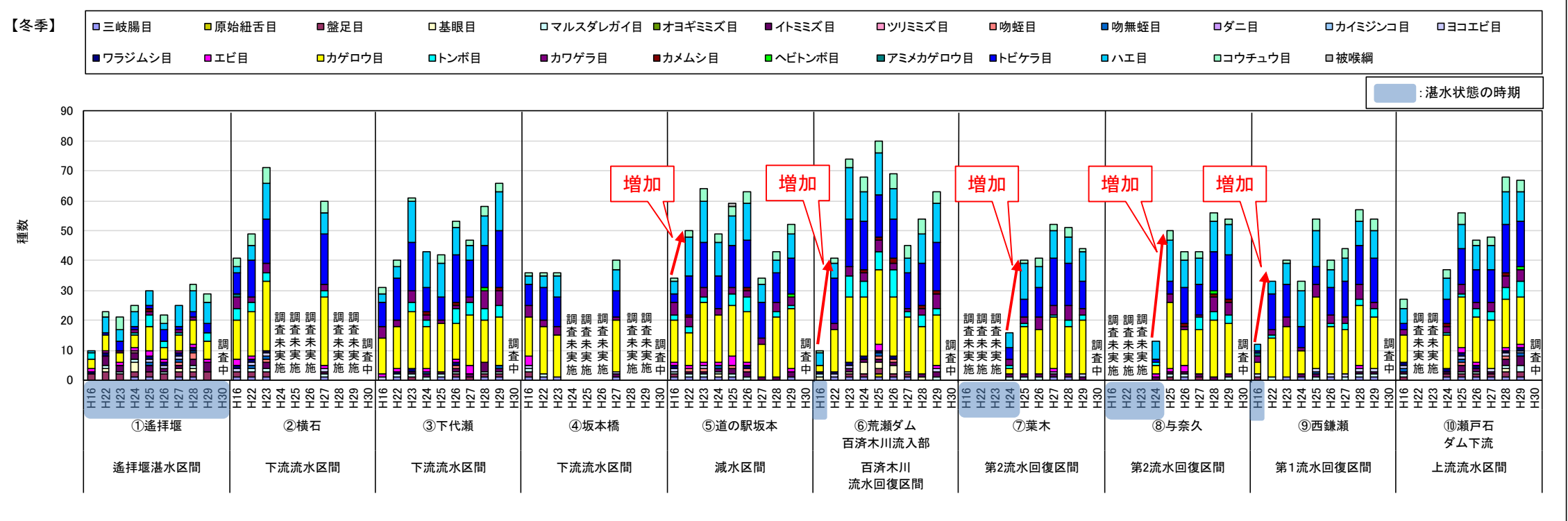
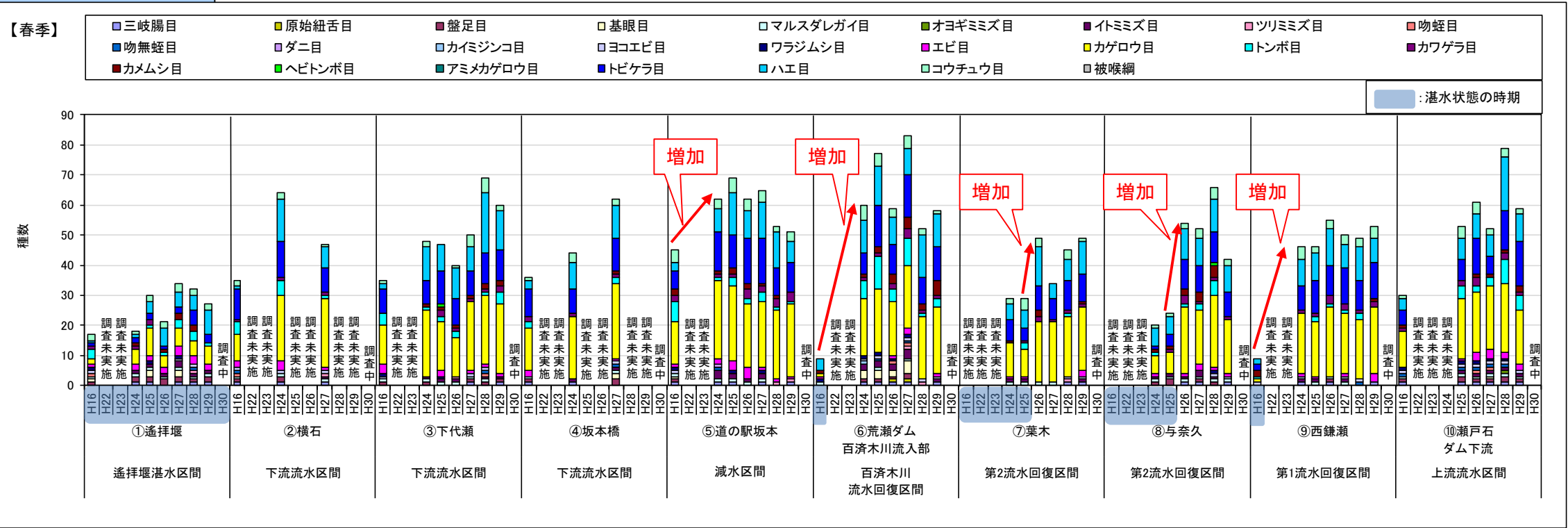


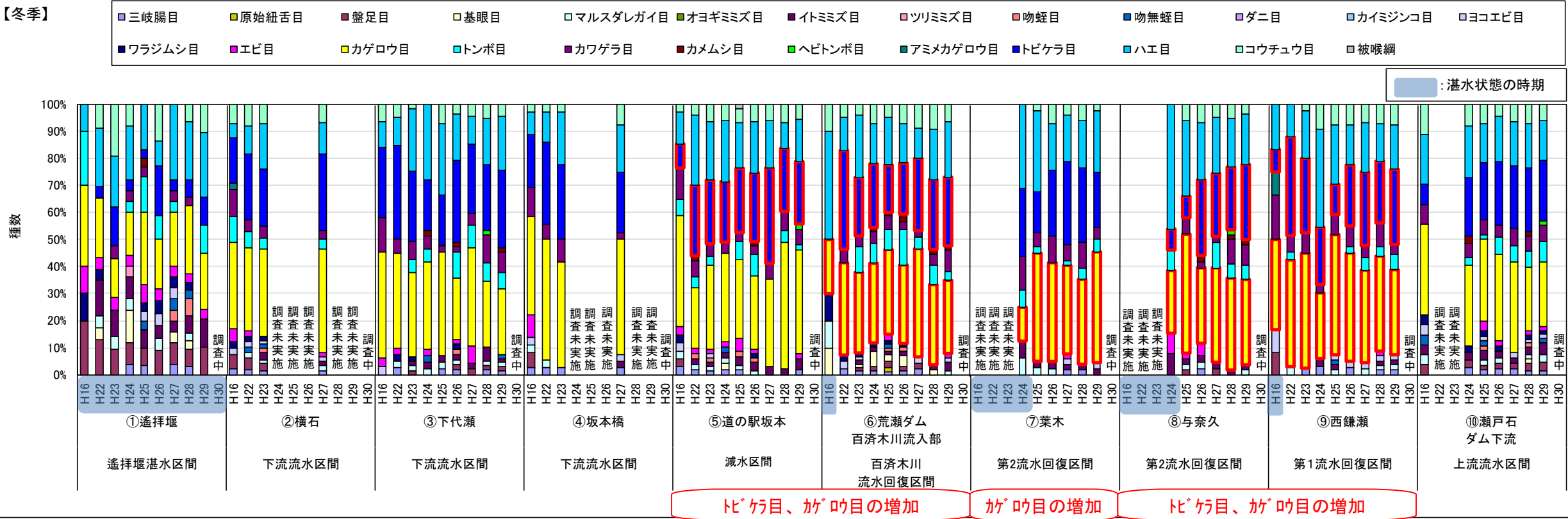
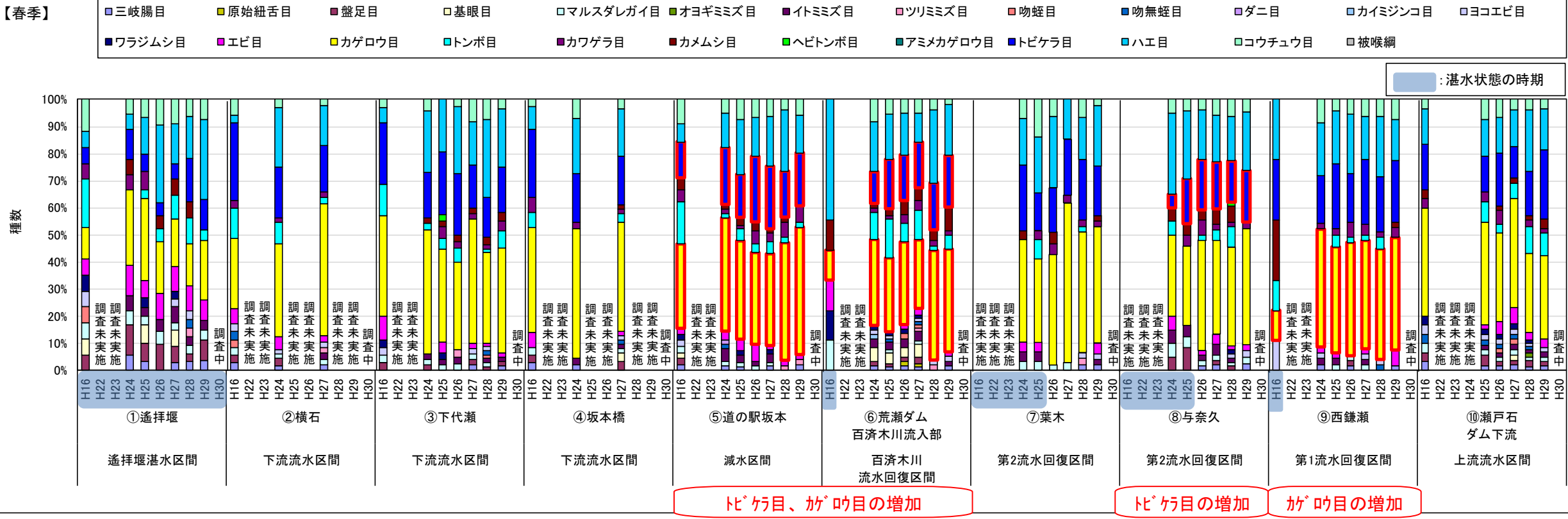
2) 底生動物（調査日 春季：平成 29 年 6 月 5～8 日、冬季：平成 30 年 1 月 10～11 日）

評価項目	視点	平成 29 年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	全確認種数 目別の構成割合 流水性種の種数	- 確認種数は、荒瀬ダム上流の流水回復区間、下流の減水区間において、湛水状態から流水状態への変化後に種数が増加し、その後傾向は継続している。 - 目別の構成割合は、荒瀬ダム上流の流水回復区間、下流の減水区間において、湛水状態から流水状態への変化後に流水性のトビケラ目やカゲロウ目等の割合が増加し、その後傾向は継続している。 - 流水性種と止水性種の種数は、荒瀬ダム上流の流水回復区間、下流の減水区間において、湛水状態から流水状態への変化後でも止水性種の種数はそれほど変化していないが、流水性種の種数は急増し、それ以降、流水性種の割合が高い状態を維持している。	- 荒瀬ダム下流部では、減水区間で荒瀬ダム撤去事業により流量が回復し、底生動物の種数や多様性が増加した。 - 荒瀬ダム上流部では、荒瀬ダム撤去事業により止水環境から流水環境に変化し、底生動物の種数や多様性が増加した。

底生動物の全確認種数

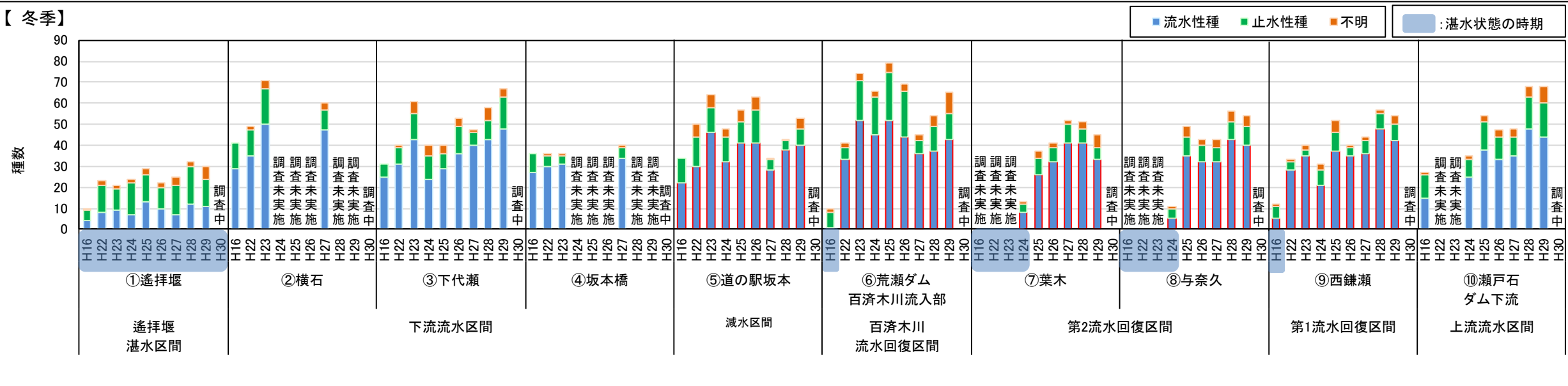
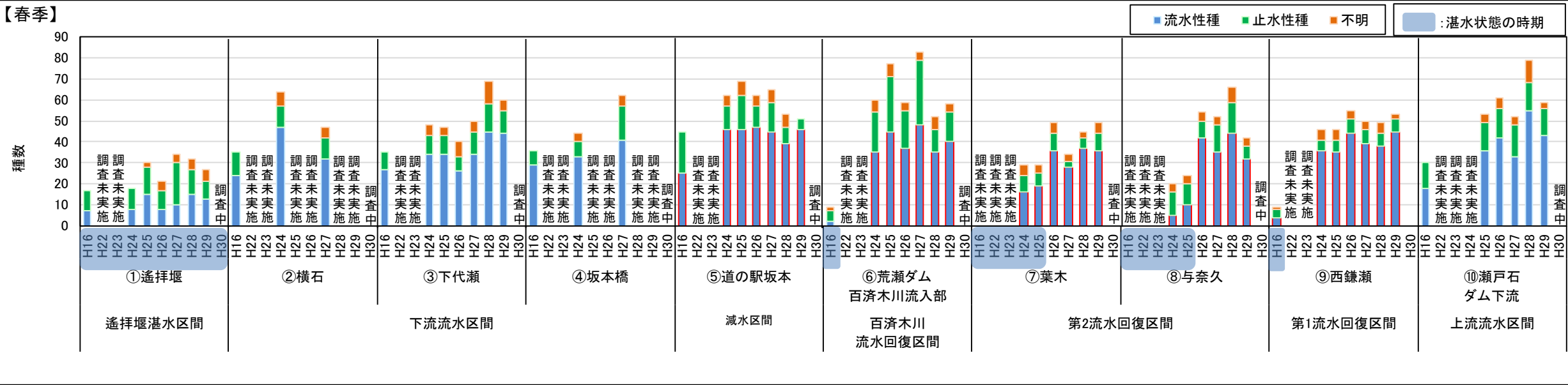


底生動物の目別の構成割合



註) 流水状態への変化後にトビケラ目、カゲロウ目の増加が確認された箇所について 赤枠で示す。

流水性種の種数



註) 流水状態への変化後に流水性種の増加が確認された箇所について 赤枠で示す。

流水性の代表種



- ・日本中に多数生息するカゲロウ目の代表種。
- ・石表面に張り付き、付着藻類を食べる。
- ・羽化期は3～12月であるが、ピークは冬季。



- ・日本中に多数生息するカゲロウ目の代表種。
- ・石表面に張り付き、付着藻類を食べる。
- ・羽化期は5～11月。



- ・日本中に多数生息するトビケラ目の代表種。
- ・河床のやや大きな石の間に捕獲網を張り、そこにかかった流下微粒子を食べる。
- ・羽化期は4～10月。

【用語の解説】

・流水性種と止水性種：流水性種は、河川の瀬を主な生息場とする種。止水性種は、湖沼や水田を主な生息場とする種。荒瀬ダムの撤去によってダム上流域の水位が低下し流速が増すと、流水性種が増加し、止水性種が減少すると考えられる。代表例として、流水性種ではカゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の大部分の種が、止水性種ではマキガイ綱、ミミズ綱等に含まれる種が挙げられる。